

睡起偶成

王

守

仁

四十余年睡夢の中

今より醒眼始めて朦朧

知らず日已に停午を過ぐるき

起つて高樓に向つて曉鐘を撞く

【作者】王陽明（一四七二～一五二八年）明代の儒學者、哲學者、政治家。陽明学の祖。名は守仁。字は伯安。陽明先生と称された。浙江省余姚の人。「知行合一」（？？）一念の發動する、すなわちこれ行である（？？）、「致良知」（？？）内心修養の方法（？？）の説を唱えた。著に『伝習録』がある。

【語釈】*四十餘年：作者が自覚した年齢になる。 *睡夢中：夢の中。眠つて。夢を見ていた。自覚がなかったことをいう。

*朦朧：おぼろげに見えるさま。 *高樓：たかどの。 *曉鐘：夜明けを告げる鐘。黎明を告げる鐘。

【通釈】今までの四十余年は眠っている時の夢の中であつた。今は目を覚ましたが、初めのうちはほんやりとしていた。

太陽は、正午をとくに過ぎていくのが、わたしは分からなかつた。たかどので起ち上がつて、夜明けを告げる鐘を打ち鳴らそう。

【備考】眠りより覚めて偶然にできた詩。哲學者の作品なので、含むところは深いものがあるが、一般的な字義、語義、語法に従つて解釈する。

なお、大塩平八郎はこの詩を愛したという。

◎偶成＝然にできた詩。ふとした思いつきでできた詩。普通は、絶句に多く見られる詩題。